委託スタッフによる「ライフラインとしての学術情報を効果的に提供するための試み」：愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センターの事例

對村 絵美¹⁾，貴田 愛子²⁾，小林 瑞穂³⁾，細田 真里⁴⁾，吉田 尚恵⁵⁾

愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター

I. はじめに

平成18年4月から愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センター（以下、当館という）の委託スタッフとして勤務し、平成18年5月に行われた第77回 NPO 法人日本医学図書館協会総会の第4分科会「医学図書館の業務委託－専門性、形態等からその是非を問う－」に参加した際、「委託は否応なしに外圧的にのしかかってくる問題である」と、図書館の専門職員が直面しているさまざまな戸惑いや苦悩に触れることができた。委託を前向きに捉える意見もあったが、多くの図書館ではどうにかして委託化を避けられないかと考えているように感じたことは、とても印象深い出来事であった。

今回、平成18年度第13回医学図書館研究会において、業務委託の実例の発表を依頼され、「ライフラインとしての学術情報を効果的に提供するための試み」と題して、日頃の図書館での委託スタッフによる取組みを紹介することとなった。

「誰もが使える図書館」にするために業務委託スタッフはどこまで貢献できるのか？という観点から、具体的な取組みを紹介し、委託スタッフも利用者側に立った図書館づくりの推進力になり得る、という考えを示すべく、内容をまとめ発表した。以下にこの内容を報告する。

II. 業務委託の内容

まず当館のこれまでの経緯を簡潔に説明すると、当館はキャンパスを別にする愛知学院大学図書館情報センターに対し、小規模な歯学部分館としてあった。しかし平成17年度に歯学部キャンパスに薬学部が増設されたことに対応して、平成17年4月から「愛知学院大学歯

学・薬学図書館情報センター」に組織変更し、さまざまな改革をすすめる中、その一つとして業務の委託化が進められた。

委託スタッフが行っている主な仕事は情報提供業務であり、具体的には閲覧業務、相互貸借業務、雑誌の受入・整理などを担当している。その他にホームページの管理や簡単なレファレンス、また図書館利用ガイダンスや医中誌Webなどのデータベースの説明会を行うこともある。

人員構成は、現在5名の委託スタッフと、センター長を含めた5名の専任職員、合わせて10名の構成となっている。

委託業務を行う中で重視していることは、現場の声の積極的発信である。「現場の声」とは、図書館利用者の声であり、その利用者と接している委託スタッフ自身の声でもある。

図書館を利用する際の問題点に気づいたら、まずスタッフ内で検討し、改善策を立てた上で専任職員に報告する。その行動の結果、いくつもの策が承認され実行された。

今回の発表では、①全図書の分類番号の細分化を強く主張したこと、②指定図書の配架表示の改善、③雑誌目録のデジタル化、という3件の事例を紹介した。

1. 全図書の分類番号の細分化

まず細分化であるが、当館の資料は歯学系の資料が大半を占めている。しかしこれを日本十進分類法（以下、NDC）による分類で分けると、大まかすぎて歯科学の細かい分類に対応できないという問題があった。497.2という分類番号を例にあげれば、497.2はNDC第7版では、主に歯の疾患、診断、検査、治療というカテゴリーであったが、愛知学院大学の講座や附属病院の診療科を考慮して分類すると、高齢者歯科、有病者歯科、障害者歯科、う蝕症（むしば）、口腔治療、歯周疾患、歯科放射線という7つの分野が含まれている。この7分野の本が混在し

¹⁾ Emi TSUSHIMURA : 〒464-8650 愛知県名古屋市千種区楠元町1-100. Tel.052-751-2561 Fax.052-752-6664 Agulibd@dpc.aichi-gakuin.ac.jp

²⁾ Aiko KIDA, ³⁾ Mizuho KOBAYASHI, ⁴⁾ Mari HOSODA, ⁵⁾ Naoe YOSHIDA (2007年2月23日 受理)

表1. 愛知学院大学歯科学分類－497.2の例

NDC9版をもとにして分類番号*を追加した。

分類番号	項目(主題)	説明	本学該当講座等	備考
497.2	歯の疾患、診断、検査、治療	7版から変更無し		
	歯髄炎			
*497.21	高齢者歯科		[高齢者歯科]	
*497.22	有病者歯科	附属病院の診療科を考慮して展開		
*497.23	障害者歯科		[障害者歯科]	
497.24	う蝕症 [むしば]	9版新設		
*497.25	口腔治療	歯科保存学第二講座特有主題	歯科保存学第二 (口腔治療)	
497.26	歯周疾患：歯槽膿漏症	9版新設	歯科保存学第三 (歯周治療)	
*497.28	歯科放射線	歯科診断関連概念	放射線学	

て何百冊という数で配架されている状況は、利用者にとって混乱を招くものであった。ほとんどの歯科学系の資料が、このような大まかな分け方で配架されていたので、利用者からは目的の図書がどこにあるのかわからないというクレームをたびたび受けていた。実際に日々図書の配架を行う委託スタッフもその不便さを痛感していた。

そのため、当館では新たな学部の開設の機会にともない、平成16年度受入以降の資料をNDC第7版から第9版に移行し、さらに497歯科学の分類において、前述の例のように講座や診療科を考慮して独自に細分化を行い、問題解決を図った(表1)。このことについては当館事務長が平成16年度第11回医学図書館研究会で事例報告をしている¹⁾。

だが、それでも書架の9割以上の資料は平成15年度以前に受け入れたものであり、それらは古い分類番号のまま配架されている状況に変わりはない。つまり、実際に必要としている現場の利用者にとっては依然としてその問題は解決されてはいなかったのである。

そこで利用者の声を代弁すべく、今現在、当館で所蔵する全ての歯科学資料を細分化し、分野ごとに配架することを約一年にわたり、何度も訴えを続けた。

その結果、ようやく平成15年度以前に受け入れた資料も全て細分化され、分野ごとに配架されることとなり、平成19年2月全作業が完了した。

2. 指定図書の配架表示の改善

指定図書とは講義担当教員が講義に関連した参考図書として指定する図書のことであるが、当館では指定図書は「指定図書コーナー」に集めて配架している。

しかし、当館のOPACで検索すると、指定図書は一般図書と配架表示が同じになっていたため、検索結果の図書が「指定図書であり、指定図書コーナーにある」ということさえ分らないという問題があった。

指定図書の存在を把握して配架する図書館員では気付かなかったが、利用者に検索結果の配架場所を尋ねられ

て、探してみると指定図書であることがたびたびあったため、ようやくこの盲点に気が付いた。

そこで、指定図書は指定図書コーナーにあることが、ひと目で分かるOPAC表示を提案した。これまで開架書庫かの2通りしかなかった館内の表示区分に、指定図書や学部教科書、PBL教育図書などの区分を追加する、というものである。

その結果、検索した図書は指定図書であり、指定図書コーナーに行けばあるのだということが利用者にも分かりやすくなった。

3. 雑誌目録のデジタル化

3つめの改善例は雑誌目録のデジタル化である。当館では長い間、冊子体の雑誌目録を使用していた。しかし、このような冊子体の雑誌目録だと劣化しやすく、内容変更の際に手間がかかる。そして何より、この目録が図書館にしか置いていないという不便さがあった。そこで、雑誌目録をデジタル化し、図書館ホームページに所蔵雑誌リストとして載せることを提案し、平成18年度秋、実現した。

現在は図書館ホームページに所蔵雑誌のタイトル一覧が公開されている。それぞれの雑誌を選択すると、何巻の何号まで所蔵しているかなどの最新情報を確認することができるようになった。

Ⅲ. 発表のまとめ

このように、委託スタッフがもたらした変化はとても些細なことではある。しかし、なかなか気付きにくく、後回しにしてしまうようなことが、実は利用者にとって望まれているのである。

閲覧を担当する委託スタッフが、利用者の要望を確実に掴み、図書館と利用者との間に入り、図書館の内側から利用者の声を発信することで、よりスムーズに、必要なサービスの向上に貢献できたといつてよいのではないかな。

現在、当館では委託スタッフと専任職員の発想のコラ

ボレーションによる「誰もが使える図書館」を目標としている。

「専任職員は、単純化した図書館業務を委託に任せる事により、より専門的な問題に取組み、図書館自体の整備とサービスの向上に専念することができ、委託スタッフが、利用者の立場からさらに図書館に要求されるサービスを提供する。」というものである。

その相乗効果の報告を含めた改革案が認められ、平成18年度私立大学等経常費補助金「私立大学教育研究高度化推進特別補助」として文部科学省から補助金を得ることが出来るようになった。

今後、委託スタッフとしてできることの中で、更なる「誰もが使える図書館づくり」に貢献したいと考えている。

IV. 今後の課題

まず、専任職員側に、現場の声に耳を傾けようとする姿勢が不可欠である。いくら委託側が改善策を提案しても、専任職員側が聞く耳を持たないという姿勢であれば、まったく事は動かないからである。

今現在、私たちは恵まれた環境におかれている。しかしながら、この環境がいつまでも続くとは限らない。人事異動などで人の環境が変わった時でも、何でも言い合える上下の関係をいかに保つかが問題になってくる。

次に、これは受託会社との問題ともいえるが、委託にはどんなに努力をしても昇給のような評価がないという問題がある。正職員より経費が安く上がるというのが委託や派遣の最大のメリットであるからだ。この状況で常に自ら考え行動し、提案していくという積極的な姿勢を保ち続けられるのかどうか。

それは、図書館サービスの内容が濃くなった結果、委託契約外の新しい仕事が増えた場合どう対処するか、という問題に関連がある。例としては、平成17年に1キロほど離れている分室の病院図書室と当館との間で、双方で本を取り寄せ、貸出・返却できるという学内相互利用サービスを始めたが、これにより、時に専任職員にも手伝ってもらえるものの、委託スタッフは毎日重い本を何冊も抱えて双方を行き来しなくならなくなった。また平成18年度の春、学生に対して行った図書館ガイダンスやデータベースの説明会なども、単なる事務処理とは違うかなり内容の濃い仕事であり、厳密に言えば契約外の仕事といえる。今後も、契約内容を超える仕事も引き受けざるを得ないと思われるが、現状ではその場合の対策はない状況である。

図書館に委託を使うメリットを残しながらも、委託側がサービスの向上に積極的でいられる環境づくりをどう考えるのか、今後の委託化において大きな課題であるといえる。

V. 質疑応答

発表後に質疑応答があった。質問は以下の四つであった。

1. 専任職員とは完璧な分業か

委託契約内容の一文に「専任職員補助」というグレーゾーンがあるため、完全な分業とはいえない。

2. 起用資格は何か

受託会社であるカムイ株式会社の代表取締役社長と面接を行った。司書資格が必要である。

3. 司書に関わる研修はあるのか

当館事務長の方針もあり、図書館業務の知識を深めるため、年間を通して開催される、各研究会、勉強会、研修等に委託スタッフも積極的に出席している。その際の出張費等は受託会社が支払っている。

4. 更新契約はどのようなか

更新契約は一年であるが、希望する限り継続可能である。

VI. おわりに

最近ではテレビドラマのテーマになるほど、派遣や委託といった非正職員は社会全体の中で欠かせないものとなっている。しかし、図書館においては司書の資格を取得しても正職員にならない志願者が選ぶ道でもあるといえる。今回の発表では、委託スタッフとして働く立場からのありのままの状況を報告した。専任職員側、非専任職員側それぞれに図書館のことを考え、やりがいを持って働ける環境が整備されるための参考として頂ければ幸いである。

謝辞

研究大会での発表と本稿執筆に際して、専任職員の方々(作野誠、中野弥生、大島由起、富田一文)に協力と指導をいただいた。記してお礼としたい。

参考文献

- 1) 作野誠, 中野弥生, 藤岡聖子, 大島由起. NDC9版に準拠した歯科学分類独自展開の取組み: 愛知学院大学歯学・薬学図書館情報センターの事例. 医学図書館 2005;52(2):145-51.

The Attempts to Offer Effectively Academic Information as a Lifeline by Temporary Staff: The Case of Aichi Gakuin University Dental and Pharmaceutical Library and Information Center

Emi TSUSHIMURA, Aiko KIDA, Mizuho KOBAYASHI, Mari HOSODA, Naoe YOSHIDA

Aichi Gakuin University Dental and Pharmaceutical Library and Information Center. 1-100 Kusumoto, Chikusa, Nagoya-city, Aichi 464-8650, Japan

Abstract: We were asked for a presentation that was an example of outsourcing in the library, and so we introduce herein to this congress the daily activities of the temporary staff. The main work that the temporary staff performs is offering information, and through the performance of this duty, the staff contribute to improvement of the library service. We perform the following action when we notice any problem. At first we have a discussion with all temporary staff about the plan to improve the problem, and then report it to the official staff. As a result of the action, many measures have been approved and carried out.

In this presentation, we introduce three examples of such measures.

1. To assert that the call number of all books should be

subdivided

2. To improve the display of the textbook shelves

3. To digitize the journal catalogs

These changes that temporary staff brought about may be small, but they have met the needs of the users. Now, our library is trying to be “The library where any user can get easily what they want” through implementing ideas born through collaboration between the official staff and the temporary staff. We temporary staff would like to make more contribution to this challenge from now on.

Key words: temporary staff; outsourcing in the library
(*Igaku Toshokan* 2007;54(2):146-149)